

島根県邑智郡

桜江町遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ

1990

島根県邑智郡桜江町教育委員会

序 文

本書は、桜江町教育委員会が国の補助を受けて、平成元年度に実施した遺跡詳細分布調査の報告です。

本町における遺跡の分布状況の把握は、昭和58年度に島根県教育委員会において実施された製鉄遺跡の調査報告書で知るのみであり、開発工事等ではじめて縄文土器や須恵器の出土が確認されているという状態であります。このため、町内遺跡の分布実態を明らかにし、開発工事等による遺跡の破壊を事前に防ぎ、埋蔵文化財の保存を図るために平成元年度から2年間で遺跡の詳細分布調査を実施するものであります。

今後は、これらの資料を参考にし、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるとともに、教育、学術、文化振興と郷土の歴史を知る重要な資料として幅広く活用していく所存であります。

終わりに、本報告書を発刊できる運びとなりましたことを喜ぶとともに、調査実施に当たり、多大なご援助、ご協力を頂きました島根県教育委員会文化課、並びに広島大学文学部考古学研究室をはじめとする関係各位に対して厚く御礼申し上げます。

平成2年3月

桜江町教育委員会

教育長 平 田 重 篤

例　　言

1. 本報告は、平成元年（1989）度において国及び県の補助を受けて桜江町が実施した町内遺跡詳細分布調査の報告である。遺跡分布図と主要遺跡の概要で構成している。
2. 本年度の分布調査は、桜江町大字谷住郷、坂本、大貫、鹿賀、田津、川越地区を対象とした。他の地区については、平成2年（1990）度に実施する予定である。
3. 調査の事業主体及び体制はつぎのとおりである。

事業主体 桜江町

事務局 桜江町教育委員会 教育課長 今田米蔵

　　"　主任主事 河瀬隆司

調査指導 島根県教育委員会文化課 埋蔵文化財第一課長 宮沢明久

　　"　主事 鳥谷芳雄

調査員 広島大学文学部講師 河瀬正利

調査補助員 広島大学文学部大学院生 竹広文明

　　"　村上恭通

協力者 平田正典（江津市）、原田静雄、龍山法外、反出一之、中島寿美、甚田浩外

4. 調査にあたっては、土地所有者、遺物所蔵者、桜江町文化財保護委員の方々など地元の多くの方々の協力を受けた。

5. 本報告の執筆、編集は河瀬が担当した。遺物の整理、調査資料の整理には竹広文明、村上恭通氏ほか広島大学考古学教室の学生の協力を受けた。

6. 採集遺物や調査資料については、松下正司、岩本正二、鈴木康之氏（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所）、三浦正幸氏（広島大学工学部建築学教室、村上勇（広島県立美術館）から貴重なご教示を受けた。

7. 本年度の調査の遺跡台帳、採集遺物などは、桜江町教育委員会に保管している。

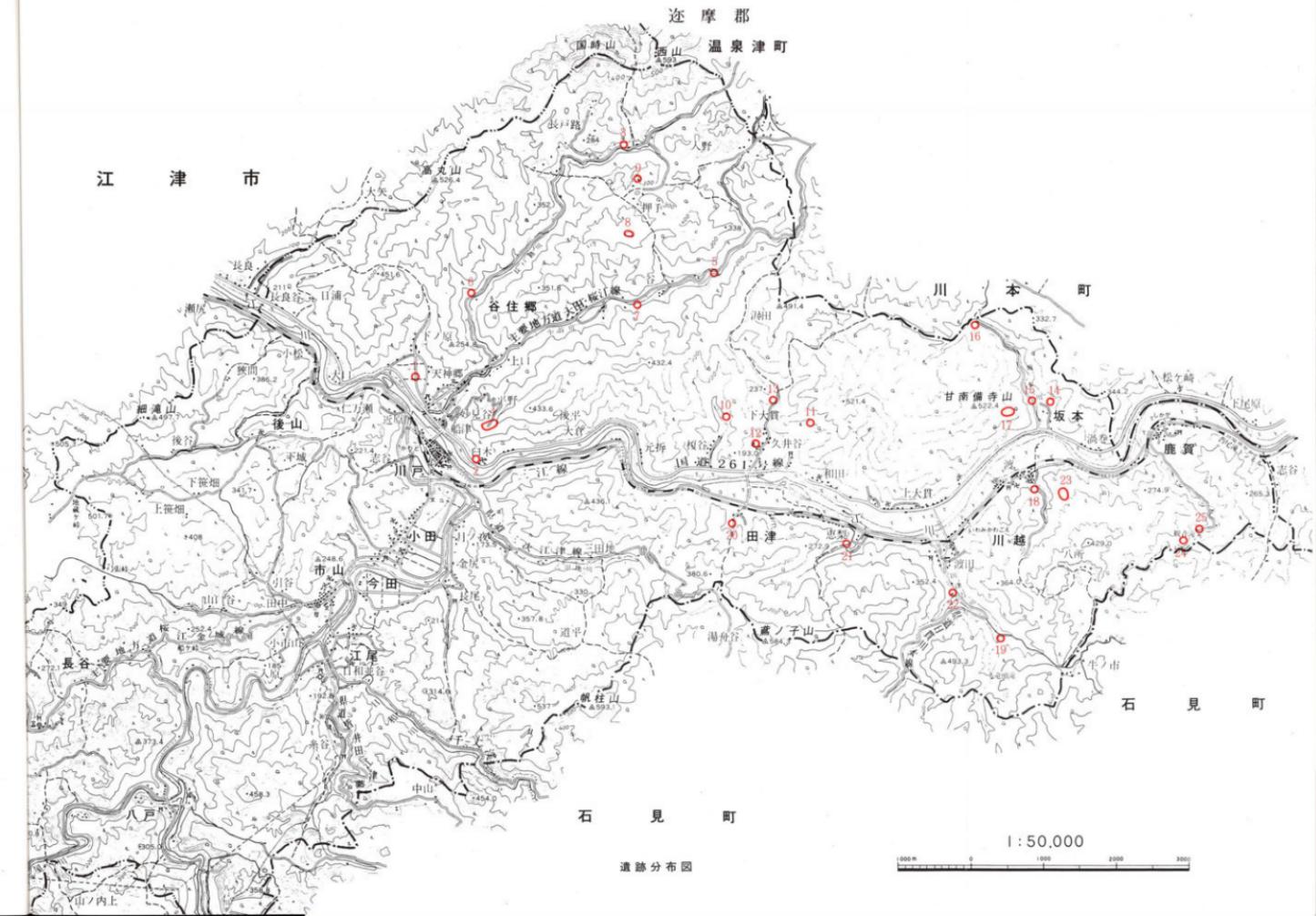


桜江町内遺跡地名表(谷住郷、川越地区)

地図番号	種別	遺跡名	所 在 地	立地、遺物その他
1	散布地	鳥居ノ本遺跡	桜江町大字谷住郷字下ノ原	沖積地内、須恵器壺が伝わる
2		臼木遺跡	大字谷住郷字臼木	現在は国道と宅地となっており、消滅している。
3	鉢跡	長戸路鉢跡	大字谷住郷字長戸路	丘陵南側山麓。宅地、道路となっている。鉄斧。付近に職人墓がある。
4	城跡	平野丸	大字谷住郷字平野	丘陵屋根上。現在テレビ塔がたっている。北側中腹に墓地がある。
5	鉢跡	上谷鉢跡	大字谷住郷字上谷	丘陵先端部。平田氏宅(星号鉢)周辺に鉄滓分布。
6		亀淵遺跡	大字谷住郷字上口	長戸路川合流点東側丘陵上。大鐵治があつたという。
7	鉢跡	伯屋鉢跡	大字谷住郷字谷	南から北へのびる丘陵裾部付近に大鐵治屋原の地名残る。※
8	城跡	押手城跡	大字谷住郷字押手	丘陵頂部に立地。南側に平坦部あり。のろし台か。
9		鍛冶屋遺跡	大字谷住郷字押手	小さな谷の谷頭に立地。宅地の隣辺に少量の鉄滓分布。※
10	鉢跡	櫻谷鉢跡	大字大貫字櫻谷	櫻谷川と小川の合流点の北側丘陵斜面。鉄滓多く分布。銚水、鉄穴場、桂などの地名残る。
11	"	奥寺鉢跡	大字大貫字久井谷	奥寺山への登山小径沿い。小川の合流点の西北丘陵斜面。鉄滓多く分布。炉壁片採集
12	鍛冶屋跡	勘場遺跡	大字大貫字久井谷	南へのびる丘陵裾部。勘(定)場の地名からみて鍛冶場があったであろう。
13	"	釜ヶ谷遺跡	大字大貫字久井谷	久井谷川の右岸丘陵裾部。墓地付近に鉄滓分布。
14		坂本1号遺跡	大字坂本	北から南へのびる丘陵裾部、鉄滓分布。※

15		坂本2号跡跡	桜江町大字坂本	坂本川右岸の丘陵體。以前には鉄滓が分布していたというが、道路により破壊されている。
16	鉛 跡	奥 谷 鉛 跡	大字坂本字奥谷	坂本川と小川の合流点の東側丘陵斜面。文献によると明治初年まで操業したという。
17	寺 跡	甘南 備寺跡	大字坂本字渡り山	甘南備寺山中腹に立地。明治17年まで寺があった。
18	鉛 跡	石原 谷 鉛 跡	大字川越字石原谷	北へのびる丘陵斜面。以前には多量の鉄滓が分布していたという。
19	〃	田 津 谷 鉛 跡	大字田津	田津谷川と小川の合流点の南側丘陵斜面。多量の鉄滓、炉壁片が分布。小鉄塊採集。
20		岡 田 谷 遺 跡	大字田津	岡田谷川と小川の合流点付近に位置。遺構などは不明。
21		江 戸 見 谷 遺 跡	大字田津	萩屋谷川の右岸段丘上。遺構など不明。
22	精鍊所跡	小 松 精鍊所跡	大字田津	田津谷川左岸の段丘上。文献によると大正7年に小松氏が経営したという。金屋子神社残る。初鉄、鉄製ロウソク立てや鳥居など採集。※
23	鉄 穴 跡	空 田 平 鉄 穴 跡	大字川越字空田平	北へのびる丘陵頂部。切羽跡、天池跡などが残る。
24	鉛 跡	鹿 貫 鉛 跡	大字鹿貫	東へのびる丘陵裾部。駐車場により一部破壊。炉跡、鐵池跡などが残っているらしい。
25	〃	火 箕 鉛 跡	大字鹿貫	南へのびる丘陵屋根先端部。

※『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅱ--石見郡製鉄遺跡』(1984)による地点を訂正する必要のあるもの。



江 津 市

迹 摩 郡

温 泉 津 町

石 見 町

石 見 町

1:50,000

遺 蹤 分 布 圖

主要遺跡の概要

1. 鳥居ノ本遺跡（大字谷住郷字下ノ原）

江ノ川右岸の沖積地の中に位置する。沖積地のほぼ中央にもともと微高地があったといわれ、この微高地から須恵器壺が出土したといわれている。第2次大戦後の昭和30年ごろ付近の耕地整理が行われ、微高地も削平され水田となっているため出土状況などは全く不明である。

須恵器壺 口径 14.0 cm、高さ 17.1 cm、頸部の径 8.5 cm、体部最大径 16.0 cm の壺である。口頸部はゆるやかに外反し、口縁部は大きく外方へ屈曲している。口縁外面には断面三角形の凸帯が付き、端部はつまみあげている。頸部に2段の櫛による波状文がめぐっている。器外面は水ひき、ナデによって調整し、体部下半は、部分的にカキ目調整の上をナデ消している。青灰色を呈し、焼成は堅緻である。松江市柴古墳群や薬師山古墳出土の須恵器に共通する特徴をもつと考えられ、5世紀中頃に製作されたものと思われる。



図1 鳥居ノ本遺跡出土須恵器

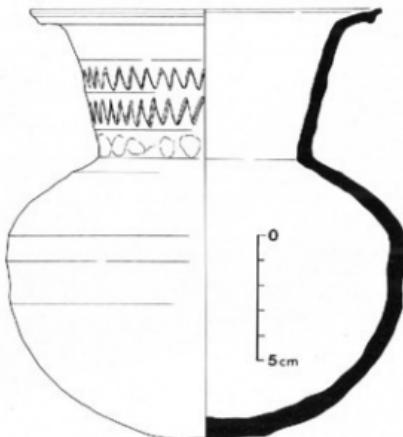


図2 鳥居ノ本遺跡出土須恵器実測図

5. 上谷鉛跡（大字谷住郷字上谷）

谷集落の最も東側奥部に位置する。南から北へのびる丘陵先端部を削平して平坦部をつくっている。現在付近一帯は平田氏の宅地（廃屋）及び水田となっているが、水田の畦畔や北側の川に面した崖面に鉄滓が分布している。平田氏は屋号を鉛と呼ばれていることからみてもこの付近に鉛跡が存在したと考えてよかろう。

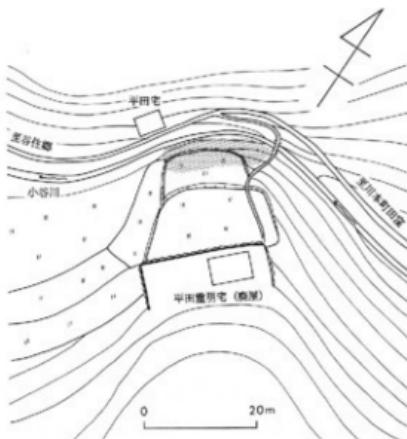


図3 上谷鉛付近略図（アミ目は鉄滓の分布範囲）



図4 上谷鉛跡遠景（中央平坦部）

10. 榎谷鉱（大字大貫字榎谷）

榎谷集落から榎谷川を約500mほど遡ったところに設置されている防水ダムの北側約500mに位置する。榎谷川とその支流の合流点の北側にある。北から南へのびる丘陵の南側斜面を削平して平坦地をつくっている。平坦面の周辺に多量の鉄滓が分布しているのでこの平坦面に炉が存在したと考えられる。付近には「銑水」、「鉄穴場」、「桂」などといった製鉄に関係する字名も残っている。

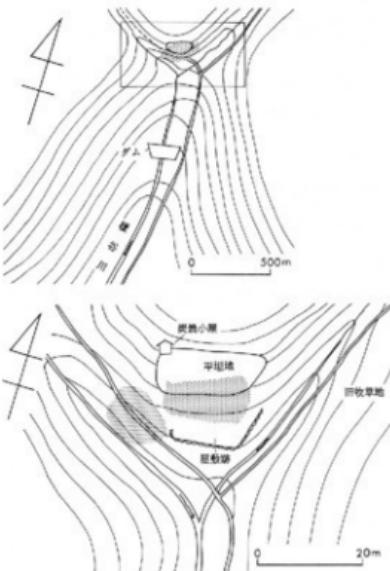


図5 榎谷鉱付近略図（下図は上図の枠部分の拡大図、アミ目は鉄滓の分布範囲）



図6 榎谷鉱跡遠景（中央杉林の中）

11. 奥寺鉢 (大字大貫字久井谷)

久井谷集落から東北の奥寺山(521.4m)へ登る谷沿いに位置している。小川と小川の合流点の西北側丘陵斜面を削平して平坦面をつくっている。上手平坦面の中央部に凹地がみられ、炉があったと考えられる。なお、鉢跡の南側谷沿いには、緩かな平坦地がみられる。製鉄に関係する作業場などが存在したのかもしれない。

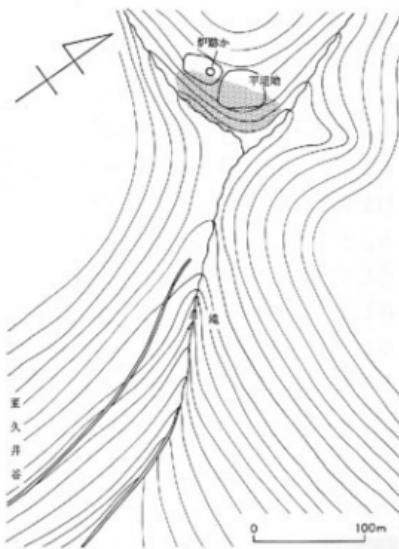


図7 奥寺鉢付近略図 (アミ目は鉄滓の分布範囲)



図8 奥寺鉢跡近景

16. 奥谷鉱（大字坂本字奥谷）

坂本川と小川の合流点の東側丘陵上に位置している。標高約150m、坂本川からの比高約15mである。丘陵西側斜面を削平して平坦面をつくっている。平坦面の北側一帯に鉄滓が分布しているので平坦面に炉が存在するとみられる。甘南備寺所蔵文書によると明治5年（1872）の浜田地震時の土石流のため鉱の操業が不能になったとされる。

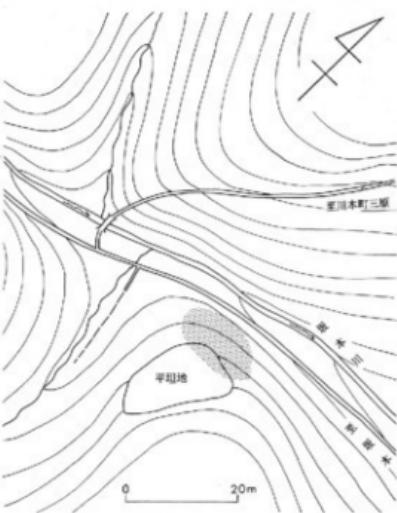


図9 奥谷鉱付近略図（アミ目は鉄滓の分布範囲）



図10 奥谷鉱跡遠景（中央部丘陵斜面中）

17. 甘南備寺跡（大字坂本字渡り山）

位置 甘南備寺跡は、江ノ川右岸に聳える甘南備寺山（標高 522.4 m）の中腹に所在する真言宗の山岳寺院跡である。甘南備寺山頂部から急勾配で東南方向にのびる丘陵屋根の傾斜がやや緩かになる標高約 250 m 付近に寺跡が位置する。この付近は、東西約 120 m、南北約 80 m ほどの範囲が隠地状に凹み、平坦部を形成しており、この平坦部に寺が営まれている。甘南備寺に伝わる明治 17 年（1884）の『寺地移転御願』によると江戸時代末期ごろから本堂をはじめとする寺の建物の破損が進んだが、明治維新後、樹木の伐採が禁止され、建築用材をはじめ薪炭材までも山林から調達することができなくなったとされている。さらにまた、壬申の地震（明治 5 年—1872）によって飲料水までも出なくなったことから、山上の寺院を甘南備寺山の南麓の江ノ川沿いに移転したい旨、島根県令（県知事）に願い出て、許可を得ている。この記録からみても、明治 17 年ごろまでは、中腹に寺院が存在したことは明らかである。また、伝承によると寺は、何度も火災にあっており、古文書、寺宝類など多くは失われている。このため寺の創建の時期や

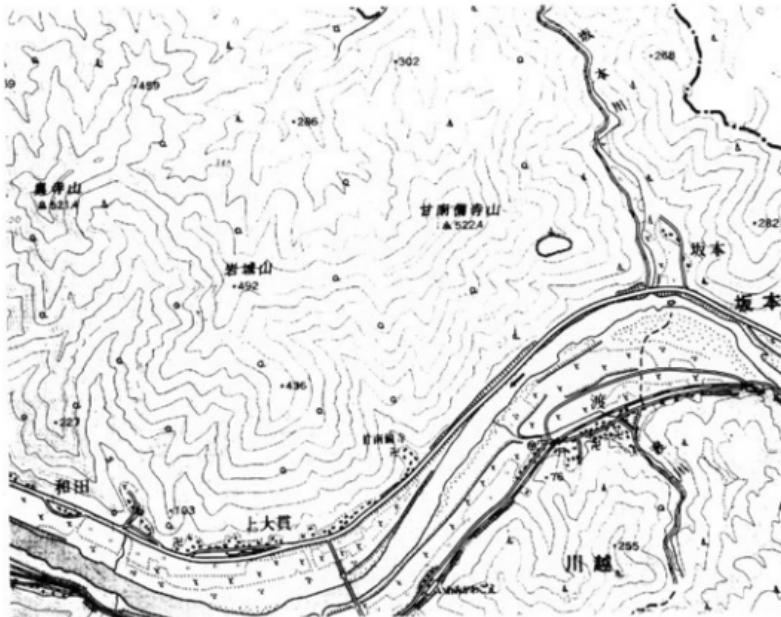


図11 甘南備寺跡位置図（1:25000）

規模などを知ることは困難であるが、現在の寺に伝わる寺宝をみると、川本町の円山城に居城した小笠原氏が天正17年（1589）に戦勝祈願のために奉納したとされる「黄幡勾威大鎧残闕」（平安時代末期の製作で重要文化財指定）や紙本墨書き写経、寄進状、また、奈良時代の作とされる鋳造製の銅鏡などが残っており、遅くとも室町時代後半には有力な戦国大名が戦勝その他の祈願のために多くの宝物を奉納寄進するほどの寺院であり、石見国を代表する寺院の一つであったことが窺い知られる。

調査の経緯 今回の甘南備寺跡の分布試掘調査は、桜江町が寺跡の将来的な保存と活用の方策を検討するために実施したものである。しかし、今回の調査計画の限られた期間と寺域の広さからみて当初の計画どおり、寺院の全容を明らかにすることは極めて困難であると考えられた。このため、甘南備寺跡の全体構造を解明することは年次計画を立案して改めて計画することとし、今年度は、寺域一帯の測量図の作成と遺構の残存状況を把握することを目的として調査を進めたのである。調査は『寺地移転御願』に記載されている『甘南備寺旧境内略図』（以下『略図』と称す）をもとに本堂跡、庫裏跡、鐘楼門跡などの位置、規模を確認するために第1区から第8区までの試掘坑（トレンチ）を設定して実施した。

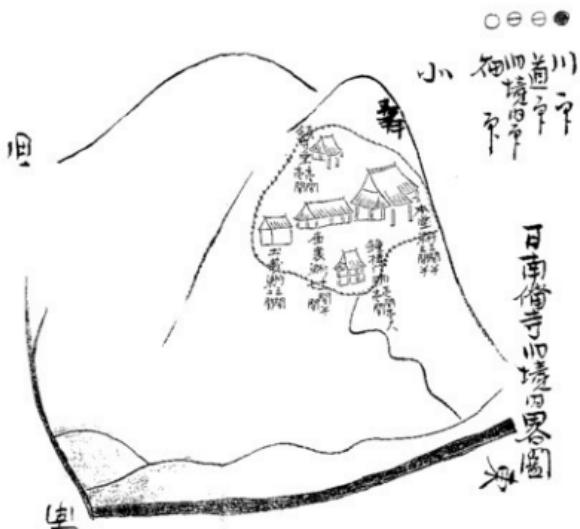


図12 甘南備寺旧境内略図（明治17年）

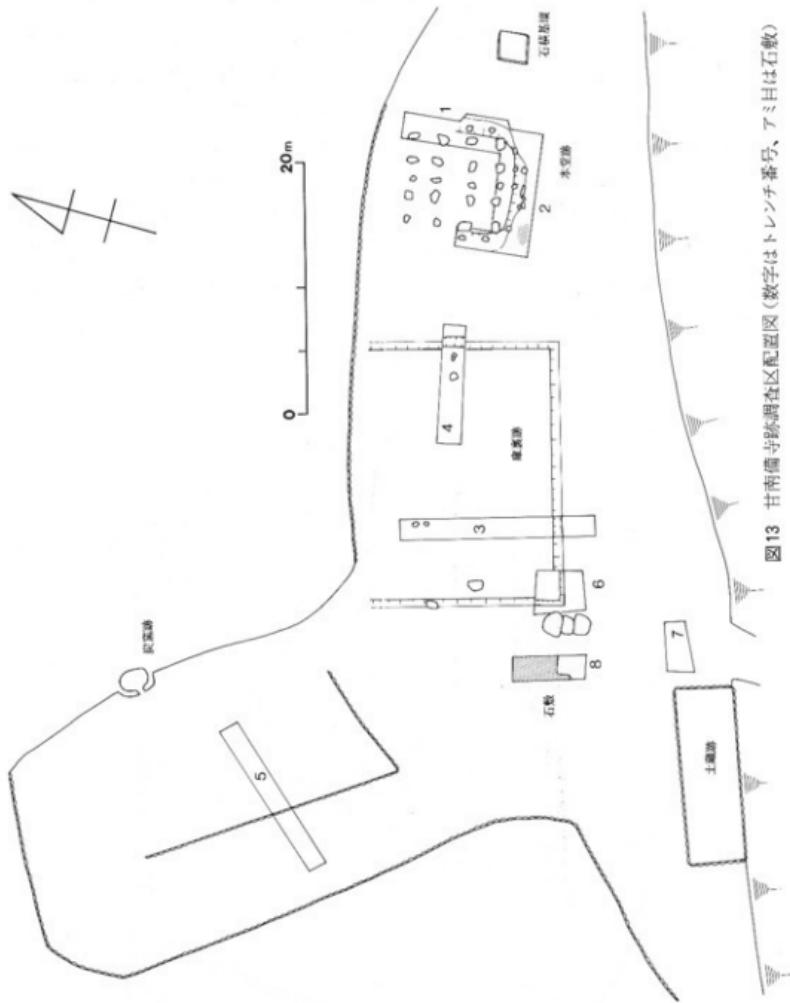


図13 甘南櫛寺跡調査区配置図(数字はトレンチ番号、アミ目は石敷)

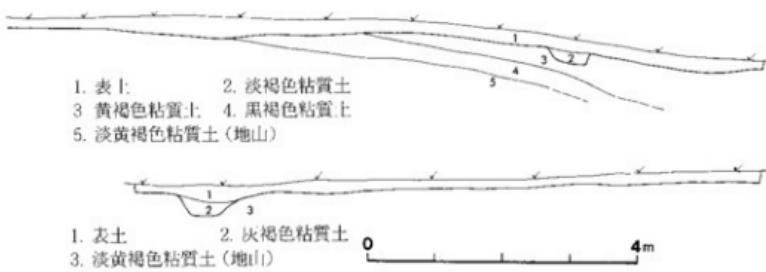


図14 庫裏跡土層断面図（上は3区東壁、下は4区南壁）

第1・2区「略図」で本堂跡に相当する地域に設定した調査区である。略図によると桁行3間半、梁間3間半の向拝付きの建物である。検出の基壇は東西約7.7m、南北約9m、また、建物は東西3間(6.6m)、南北3間(7m)の規模がある。東西の中央の柱間に東石がみられ、建物が床張りであったことを示している。また、東西の南側柱列の外側と、西側・東側の柱列の外側には縦30~40cm、横40~50cmの礎石がみられ、礎石の上面に一辺約8cmの方形の孔(ダボ穴)があるものが存在した。囲い縁の縁束の礎石と思われる。このことから外陣の外側にあたる部分には囲い縁があったと推定される。さらに南面基壇の外側にも縦30cm、横60cm前後の長方形の石が約3mの幅をもって置かれている。向拝の礎石と考えられる。なお、東側柱列と西側柱列の南側2個の礎石には、方形のくりこみがみられた。横木がわたされていた痕跡と推定される。これは外陣部分が半間であった時のものか、床を支えるために木をわたしたものであったかのいずれかと考えられるが明らかにできない。規模、構造から考えて「略図」にある本堂に相当し、しかも、略図ともよく合致する構造であるといえる。また密教本堂として標準的な規模をもっているともいえる。本堂跡出土の遺物には青磁、磁器類がある。これらは江戸時代のものと推定されるが建物の構造からすると室町時代までは遡ることができる。本堂跡の東側約6mのところからは東西2.3m、南北2.3m、高さ約50cmの石積基壇が検出された。割石で開まれた基壇内の中央部は黄白色砂、粘土が充填されている。基壇南側の上端中央部は石積みがやや凹んだ部分がみられることから、南側を正面としていたと推定される。「略図」をみて、この付近に建物がみられないで、この遺構の性格は不明であるが、規模から考えて小祠が建っていたのかもしれない。瓦、古銭(寛永通宝)が出土した。

第3・4・6区 庫裏跡と推定される地域に設定した調査区である。この地域は地表

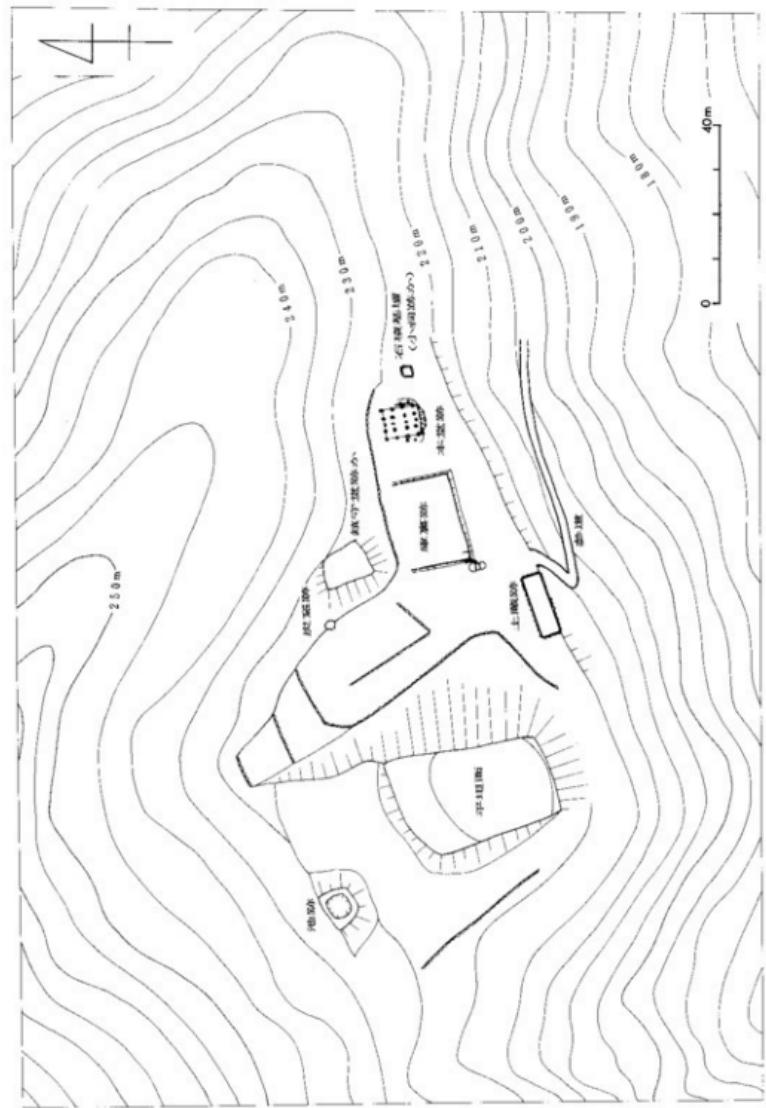


图16 甘南新寺砾油井配注地势图

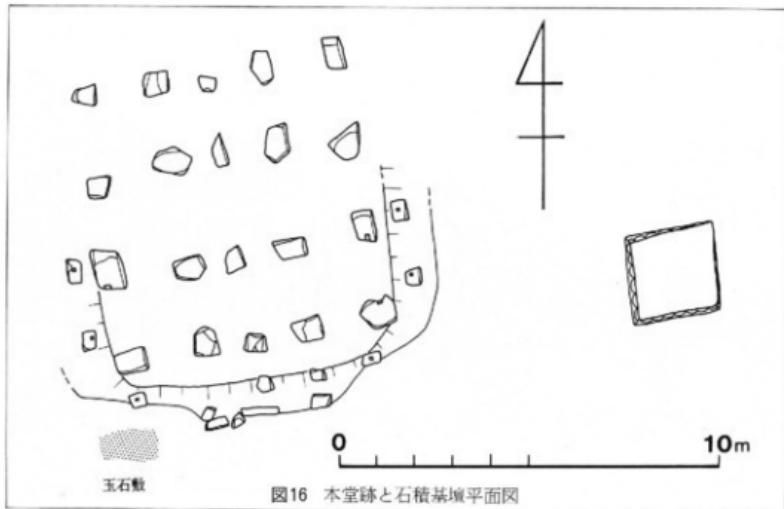


図16 本堂跡と石積基壇平面図

観察でも東西約20m、南北約15mの範囲がやや高くなつており遺構の存在が予想されたところである。第3区の上層をみると区の南半分は第5層の地盤土の上に削平土（第3層、第4層）が客土されており、そして南端近くでは第3層が溝状に凹む部分がみられた。また第4区の東よりも幅80cm、深さ30cmほど地盤土が落ちこむ部分が検出された。さらに第6区からは基壇の南西隅が検出され、基壇西面外側には石組みの溝が走ることが確認された。基壇の北面は確認していないが、東西10間半（約21m）、南北7間（約15m）の規模の建物と推定された。これは『略図』にみられる建物の位置、規模ともよく合致している。基壇規模からみて庫裏というより客殿とでも呼べる建物である。調査区からは磁器、土師質土器などが出土している。磁器は染付茶碗、皿などがあり、江戸時代後期に比定される。また土師質土器は、小皿、壺などがある。壺には高さ1～2cmの高台をもつものがみられる。底部はほとんどが糸切である。形態、特徴から室町時代後半以前に比定されるものも含まれている。

第5区 寺域の北より奥部に設けた調査区である。何らかの建物跡の存在が想定されたが、地表より約30cmは黒褐色有機土（耕作土）、その下は地盤土となっており遺構は検出されなかった。寺田でもあったのであろうか。

第7区 鐘楼門があったとされる場で、寺旧参道入口にあたる。遺構は検出されなかつた。桁1間1尺、梁1間の小型建物であったといわれる所以基壇などもともと明瞭ではなかつたかもしれない。

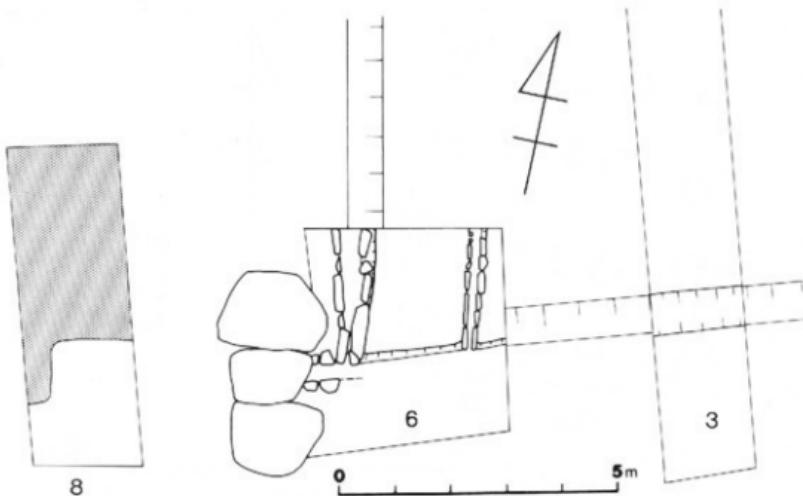


図17 本堂跡と石積基壇平面図(数字はトレンチ番号、アミ目は石敷)

第8区 庫裏跡南西隅の西側に設けた区で庫裏跡からのびる石組み溝の繋がりを確認するためである。溝はこの付近までは繋がらず礫による石敷き造構が検出された。西側に何らかの遺構が存在するようである。なお、庫裏跡南西隅では2条の石組み溝が検出された。何度か建て替えのあったことを示している。

以上今回の試掘調査では、寺跡の一部の構造からみると明治17年の旧境内略図にみられる建物の位置、構造などとよく一致することが確認された。遺物をみると本堂跡から高台付青磁片、染付皿片などが出土している。青磁片は中国製とみられ、高台の形から16～17世紀のものと推定される。また、染付皿片は、見返しに松、竹、梅などが描かれているもので江戸後期のものと思われる。

庫裏跡からは、染付片、陶器片、土師質土器片などが出土した。染付片には補修痕のあるものがみられる。文様は中国の芙蓉手を模倣したものがある。18世紀後半ごろのものと推定される。土師質土器には、小皿、高台付环などが出土した。高台付环は、高台の高いものが多い。時期は特定できないが、広島県大朝町富士神社境内出土例や山口県下関市萩根遺跡出土例などに共通することから鎌倉期まで遡るものかもしれない。

甘南備寺の創建時期については明らかにできないが、出土遺物からみて中世にまで遡ることはできそうである。今後は寺域全体の確認や創建時期などを解明するための本格的な調査と研究が望まれる。



図18 甘南偏寺跡遠景（中央部）



図19 本堂跡全景



図20 本堂跡南面



図21 本堂跡東側の石積基壇（小祠か）



図22 庫裏跡基壇東辺

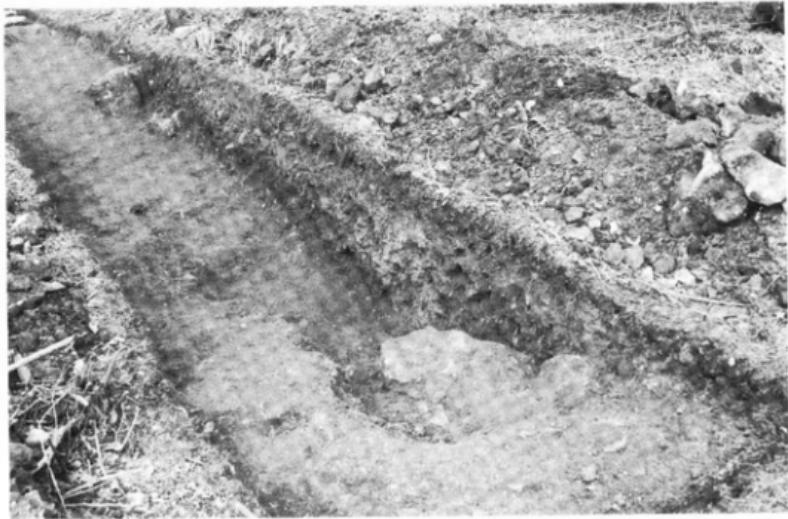


図23 庫裏跡基壇南辺



図24 車裏跡基壇南西隅

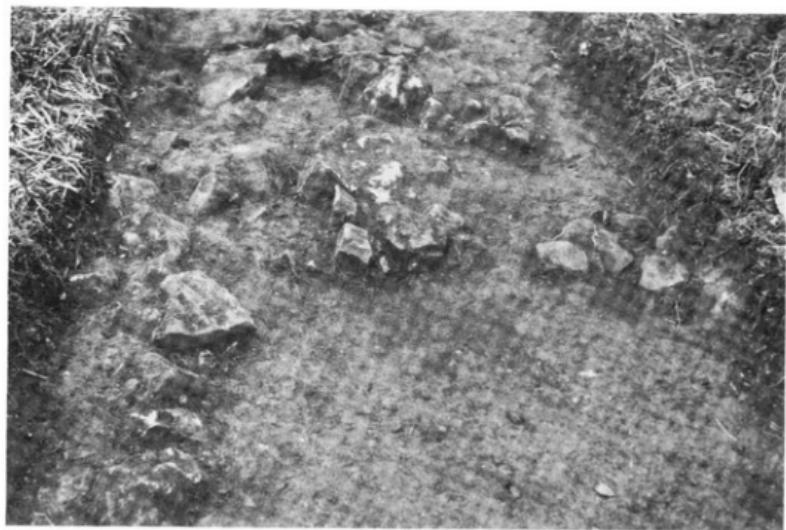


図25 車裏跡西側の石敷き



圖26 土藏跡



圖27 寺跡出土遺物

19. 田津谷鉱（大字田津）

田津谷川と龍頭滝川の合流点の南側の標高約100mの丘陵上に位置する。南から北へのびる丘陵先端部には、斜面を削平してつくった平坦面が2か所ほどみられる。この2つの平坦面の北側斜面には多量の鉄滓が分布する。炉壁片や小鉄塊も採集されているので平坦面に炉があったと考えてよい。

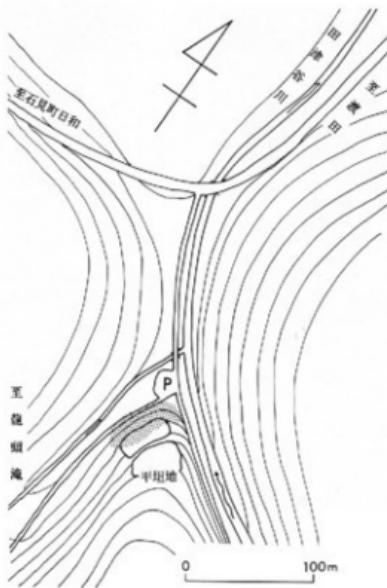


図28 田津谷鉱付近略図（アミ目は鉄滓の分布範囲）



図29 田津谷鉱跡近景

22. 小松精錬所跡（大字田津）

田津谷川とその支流（大釜谷川）の合流点の西側河岸段丘上に位置する。現在は宅地、畠となっており、構造などは不明であるが、谷沿いの護岸石垣の上に金屋子神社跡があり、長さ約50cm、厚さ1cmほどの初銃、鉄製鳥居、ロウソク立てなどが祀られている。『桜江町誌』によると大正7年（1918）に小松安市氏が経営したとされている。鉄滓吹（製銃）所跡と推定される。水車の台石も残っている。



図30 小松精錬所跡近景

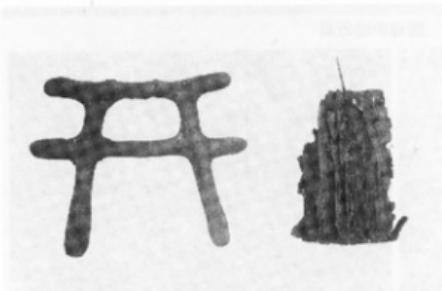


図31 小松精錬所跡金屋子神社採集鉄製品

24. 鹿賀鉢（大字鹿賀）

鹿賀谷川に向って西から東へのびる丘陵先端部の平坦地に位置する。平坦地の北側の一部は、断魚溪・觀音滝県立公園の觀音滝の入口駐車場の造成の際に壊されている。平坦面の中央に凹みがあり、焼土もみられるのでこの付近に炉があったであろう。平坦面の北側山裾の平坦地にも凹みがあるが、鉄池があったといわれている。

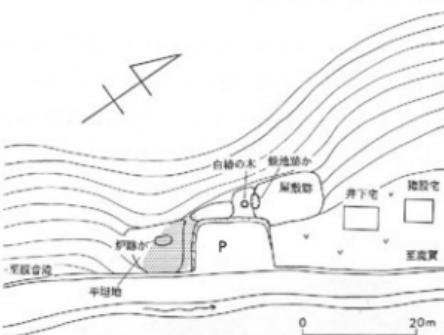


図32 鹿賀鉢付近略図（アミ目は鉄津の分布範囲）



図33 鹿賀鉢跡近景



図34 炉 跡 か



図35 鉄 池 跡 か

(参考資料)

字名による遺跡所在調べ表

(土地台帳、切り図による字名)

区 域

大字谷住郷
大字大貫
大字坂本
大字鹿賀
大字川越
大字田津

製鉄、鍛治屋、鉄穴などに関係すると思われる字名

番号	字名	地番	所有者	番号	字名	地番	所有者
(大字谷住郷)				23	釜山	1037	平田重明
1	鉢ヶ原	28-1	岡田公勤	24	多々良	1047	"
2	元屋敷前	288-1	杉原良子	25	大鍛治屋	1167	釜瀬隆司
3	元屋敷	290	船津一郎	26	柱ヶ原	1222	早弓三三
4	元屋敷上	292	平田民之助	27	釜ヶ迫向井	1424	右田シン外1
5	鉄床上落井	302	甚田春義	28	釜ヶソ子	1440	"
6	鉄床	303	"	29	中カジヤ	1725	中田繁博
7	金屋子松	310-1	杉原良子	30	カジヤ	1733	湯浅侃
8	元屋上ミ	314-1	"	31	カジヤノ前	1737	春木定美
9	本屋	315-2	"	32	妙見谷鍛治屋敷	1817	田子文江外1
10	本屋前	316-1	"	33	カジヤノ前道ノ沖	1937	滝山トショ
11	カジヤ追	502-1	石田フテ	34	研石	2522	本山兼次
12	オクカジヤ	532	杉原良子	35	庄右エ門釜	2736	嘉戸慎二
13	上ミ鉢	789	甚田安太郎	36	カジヤ床上エ	3390	右田シン外1
14	カジヤ平	881	船津龜芳	37	火釜西平	3749	岡本増市
15	カジヤ奥	882	"	38	火釜	3751	早弓三三
16	カジヤ	883	"	39	ツエ釜	3778	藤田ヒフミ
17	カジヤ横道 ノ下タ	884	"	40	カジヤ床	3786	吉岡賢治
18	カジヤ横道ノ上	886	"	41	助次釜	3811	椿竹一
19	カジヤ道 下モ平	887	"	42	釜ヶ谷下モノ切	3845	津田慢
20	釜ノ谷	906	脚分修二	43	釜ヶ谷上ミノ切	3846	森岡キク
21	"	4702	船津正嘉	44	釜ヶ谷	4064	浅原和夫
22	釜山	3947	岡本繁秋	45	"	3849	椿新治郎

番号	字名	地番	所有者	番号	字名	地番	所有者
46	二文釜	3857	和田軍三	70	釜ヶ平	1363	竹本勘一
47	惣ノ田釜	3864	平田登	71	カジヤ床	1430-1	村社八幡宮
48	鉢釜	3865	平田勇二郎	72	釜ヶ谷	3575	椿新治郎
49	鉢向	3921	岡本仁太郎	73	カジヤ畠	2717-1	嘉戸慎二
50	灰床	3934	中村仁三郎	74	火エ釜	3344	木村隆八
51	鍛冶屋尾敷	3954	平田登	75	平釜下モ	乙270	甚田安太郎
52	鉄穴片地	4095	有田康文	76	砥石釜	乙397	早弓三三
53	鉄穴上ヘ	4096	"				
54	鉄クソ平	4201	板田春義	(大字大賞)			
55	鉄クソ東平	4202	平田春	77	原釜	77-1	坂根ヨシズ
56	鉄クソ西平	4203	"	78	釜ヶ谷	148-1 926	反田マサノ 山田謙一
57	釜ヶ處後	4331	石田嘉則	79	元屋敷	269-1 273	上田満洲男 坂根庄司
58	鍛冶屋迫	4349	石田フテ	80	カナクソ	323-1	三原數男
59	小釜	4573	渡辺里美	81	元星	338	塩田豊
60	火釜	4690	渡辺市与	82	鉢ケ原沖	521-3	森山逸夫
61	火釜七ミノ切	4692	森岡キク	83	鉢ヶ原	553-1	山崎隆一
62	上鉢下モ	4695	甚田安太郎	84	鉢ヶ谷	535-1 829-3	山本義典 山崎知
63	カツラゲヅリ	乙221	中村敏郎	85	鉄クソ弥市	816	甲山幸
64	釜ノダン	乙723	杉原良子	86	元屋空	846-1	塩田豊
65	火釜奥	乙863	森岡キク	87	原釜	970	千代延昌司
66	上ミ鉢火釜	4693	"	88	安兵衛釜	978	塩田卓爾
67	カジヤ背戸	4722	船津龜芳	89	柱	983	"
68	錢神原下タ	乙553	渡辺春犬	90	鉄穴場	985	"
69	鍛冶屋	1936-2	岡本利実	91	銚水	993	"

番号	字名	地番	所有者
92	桐木釜	1001	小池武広
93	孫七釜	986	塙田卓爾

(大字板本)

94	金町	1985-2	原田弘幸
95	鍛冶屋垣内	2001	原田久之
96	下鍛治屋	2007	横田達男
97	前鍛治屋	2008-1	横田真二
98	小鉢	2020 3833	堂前勉 藏田正樹外7
99	研屋	2038-1	尾崎武夫
100	鉢原	2059	舟木久男
101	鉄町	3823	原田弘幸

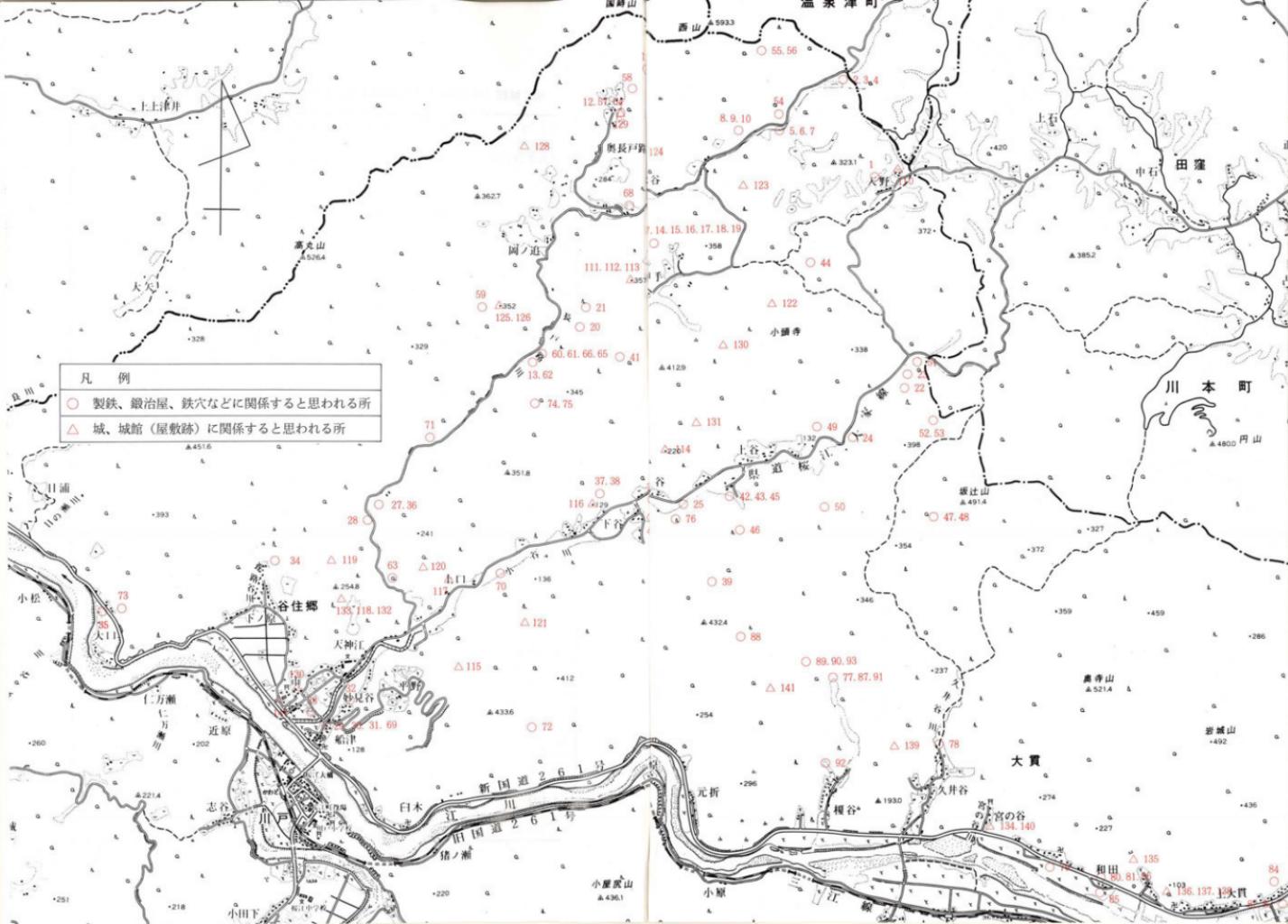
102	小釜ヶ原	628	井川幸雄
103	三ツ釜	651~ 661	井下茂夫他
104	葛石又門釜	793-1	室野速雄
105	原釜	796	安田忠義外1
106	火釜	808	"

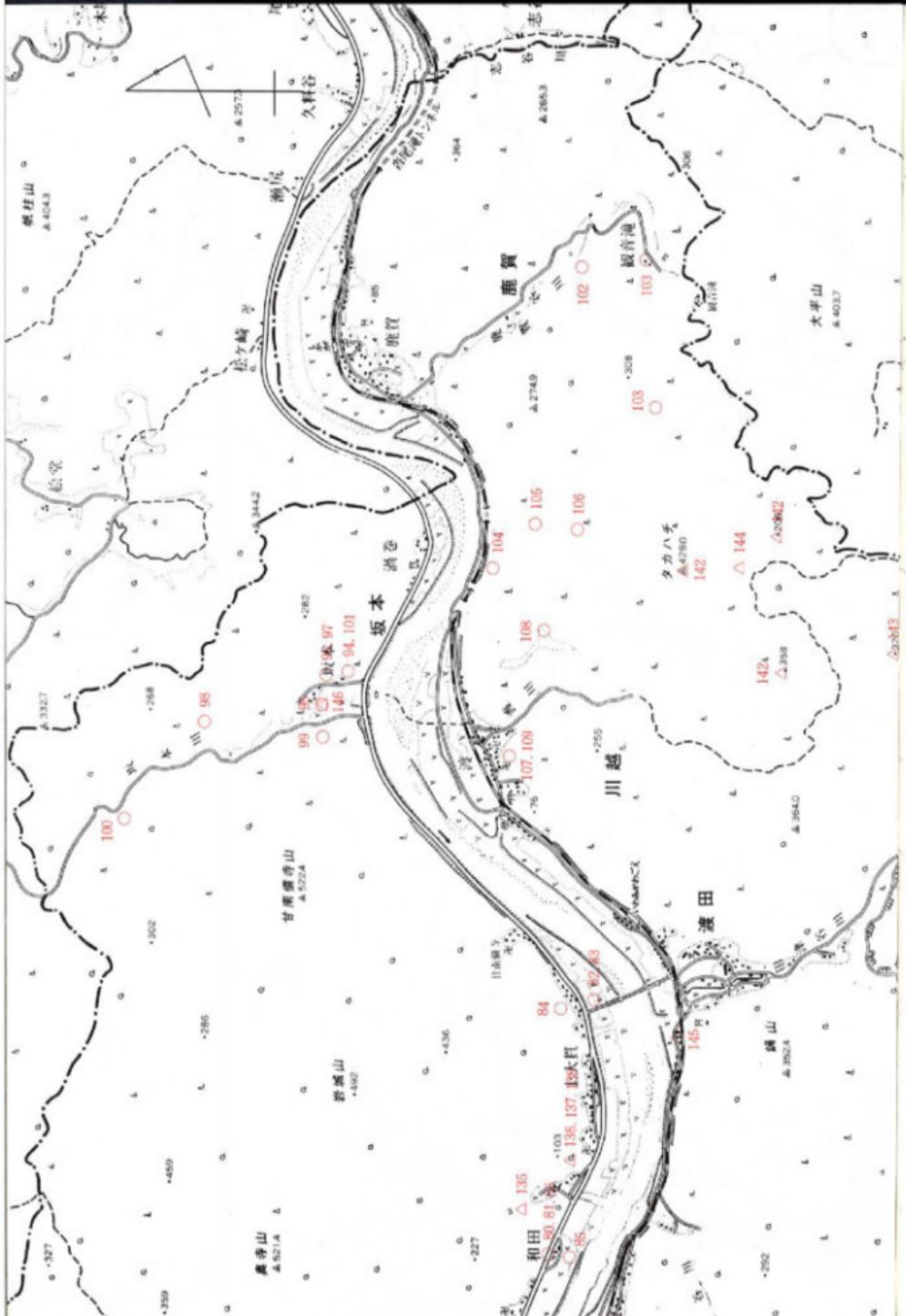
(大字川越)

107	カジヤ谷	424-1	高江辰己
108	釜ヶ谷	963-1	寺本勝彦
109	鍛冶屋谷	1041	高江辰己

城、城館（屋敷跡）などに関係すると思われる字名

番号	字 名	地番	所有者	番号	字 名	地番	所有者
	(大字谷住郷)			133	段	2437-1	大石利一
110	中垣内	7	中垣善友	147	鳥井ノ本	2250	建設省
111	堂ガ丸	905	船津正嘉	(大字大貫)			
112	"	4729	綱分修二	134	馬場	217	御嶽神社
113	堂ガ丸上ノ切	908	"	135	北堀	372	中村久左工門
114	小丸	1166	松島久男	136	城ノ前	379-1	"
115	平ノ段	1557	椿重樹	137	中村城	378	"
116	堂ノ段	1305	岡本芳松	138	城ノ上	390-1	"
117	一ノ段	1390	大石泰正	139	領土手	958-1	山岡千秋
118	段ノロク	2432	長原金造	140	堀ノ本	230-2	上田満洲男
119	サツメ段	3161	山田長一	141	矢橋	1002	塩田卓爾
120	竹城	3406	吉岡房義				
121	城ヶ平	3447	鶴島和三郎	(大字川越)			
122	桜ヶ丸	4068	浅原和夫	142	下城	745~758	月森征人他
123	千疊敷	4159	小林繁夫	143	下城山	1095	"
124	高丸	4243	船津恵子	144	矢城田	1118	月森慧
125	梅垣ノ内	4592	長田熊一				
126	岡堂ヶ丸	4624	渡辺高徳	(大字田津)			
127	堂ヶ丸下ノ切	4730	綱分修二	145	地蔵段	607-1	小松清子
128	草ヶ城	乙748	渡辺貞市				
129	釜ノダン	乙723	杉原良子	(大字坂本)			
130	倉ノ段	2062-1	吉岡房義	146	(居)上井ノ内	2005	横田求
131	八ノ段	3878	平田勇二郎				
132	段頭	3197	西村末子外1				





平成 2 年（ 1990 ） 3 月

島根県邑智郡
桜江町遺跡詳細分布調査報告書 I

発行 桜江町教育委員会
印刷 柏村印刷株式会社